

柏原御茶屋御殿

米原市は古くより近畿・東海・北陸地方の接点として、交通・交易に重要な位置を占め、文化が開けてきましたことから、今日、多くの文化歴史遺産が残されています。

その中のひとつに、「柏原御茶屋御殿」があります。徳川將軍が江戸と京都の朝廷との間を上洛・下向する際に、休憩・宿泊する將軍専用施設として街道沿いに造営したものが「御殿」、「御茶屋」と称される施設です。近江は、東海道や中山道など主要街道が通る交通の要衝であることから、水口御殿(城)（東海道）、柏原御殿(中山道)、永原御殿、伊庭御殿(朝鮮人街道)などが造営され、休泊施設として機能しました。

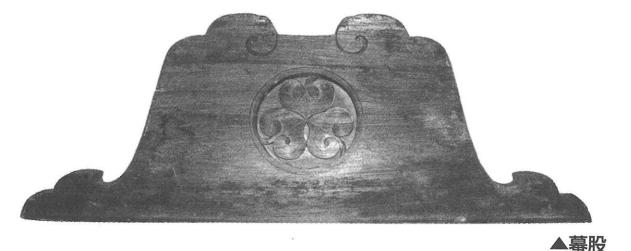
柏原御茶屋御殿は、柏原宿西の「御茶屋前」と呼ばれるあたりにありました。天正16年(1588)に徳川家康が中山道を通行した際に、当地の西村勘介家に宿泊したことを契機に、以後中山道を通過する際には同家の休泊が恒例となり、通過が頻繁となったことから、元和9年(1623)三代將軍徳川家光の上洛の際に新たに御殿が造営されたようです。

御殿は、街道に面して二つの門が開き、間口四二

間(約76m)、奥行き三八間(約68m)と小規模なものでしたが、家康・秀忠・家光の三代にわたり都合14回と県内の御茶屋御殿の中では最も利用頻度がありました。

その後、他の御殿同様、徳川幕府の権力が確立し将軍上洛の必要がなくなったことから、元禄2年(1689)に解体され、66年間の利用に幕を閉じることになりました。

写真の資料は、かえるまた 蓋股(丸に三つ葵)と称する建築部材で、後ろから見たカエルの股に似ていることからその名がついたようです。この紋付の蓋股は、柏原御殿の式台(玄関)に使われていたとされ、御殿を廃止する際、代官より殿主であった証にと西村家が拝領したものと伝えられています。(桂田 峰男)



▲蓋股

情報 BOX

◆米原市柏原宿歴史館催しの案内

企画展／「魅惑のデザイン 看板展」

◇期 間／平成25年7月9日(火)～8月4日(日) 毎週月曜日休館
※商品や店の名前を刻み人目につきやすいところに掲げたりアルな看板から、現代のユニークな看板まで、様々な看板を紹介します。
◇問合せ先／柏原宿歴史館 ☎0749-57-8020

◆米原市教育委員会では、埋蔵文化財活用事業として下記のシンポジウムを開催いたします。

『伊吹山修験と播隆・円空

～播隆フォーラムinまいばら～』

◇期 日／平成25年10月14日(月・祝)
午前：10時～午後4時30分
※午前：現地見学会(申込必要)、
午後：講演、シンポジウム

◇会 場／伊吹葉草の里文化センター(米原市春照37)
※伊吹山で修行した近世の遊行僧播隆・円空と、
関連する行場や山岳寺院の遺跡を通じて、
伊吹山修験の実態に迫ります。

◇問合せ先／
米原市教育委員会歴史文化財保護課
☎0749-55-4552

播隆肖像画(岐阜県可児市)▶

◆◆編集後記◆◆

米原市の文化財担当が四月から「歴史文化財保護課」になりました■振り返れば僕も課長ももともとの町は違えど■社会教育課・生涯学習課の文化財係、合併して文化スポーツ振興課・生涯学習課の文化財グループ■生涯学習課歴史・文化財保護室を経て、晴れて「文化財」が前面に出た課の所属となりました■スタッフ3人は市の行政機構のなかでも、県内各市の文化財所管課のなかでも最少人員かもしれません■伊吹山・靈仙山・姉川・天野川、琵琶湖の自然に囲まれ、育まれてきた米原の良さを子どもたちに、みんなに伝えたい!■今回もかつて一緒にカンボジアとかに行った植田さんから寄稿いただきました。多謝!
■佐加太への皆様の寄稿おまちしております。(シャンギリッ)

米原市文化財ニュース

佐 加 太 第38号

発 行 平成25年7月10日
編 集 米原市教育委員会
〒521-0242 滋賀県米原市長岡1050-1
米原市教育委員会歴史文化財保護課
TEL.0749(55)4552
印 刷 ピッグバードデザイン株式会社



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

第38号

2013年7月10日

滋賀県米原市教育委員会

杉沢遺跡発掘調査と地域のかかわり

杉沢遺跡の調査は昭和13年(1938)に京都大学助手の小林行雄によって、北近江で最初の発掘調査が勝居神社付近でおこなわれ、2組の縄文時代晩期後半(約2500年前)の「合せ口甕棺」が出土し、『通論考古学』や『日本考古学辞典』などに紹介され、杉沢遺跡を一躍有名なものとしました。

平成23・24年度、米原市教育委員会と立命館大学が協働で杉沢遺跡で学術的な発掘調査をおこないました。杉澤(自治会名)では、これまで11組の甕棺墓や多種多様な石器が見つかっていますが、住居跡など、墓以外の縄文時代の生活の痕跡はよくわかつていませんでした。今回の調査では、とくに住居の発見に重点が置かれました。住居が明らかになれば、杉沢遺跡の全体像を明らかにすことができ、遺跡への理解と愛着が一層深まります。墓に住居が隣接するかどうかという、晩期集落構造の議論にも貢献できます。しかし、結果的には住居の検出にはいたりませんでしたが、23年度は木の実などをたくわえた貯蔵穴1基、土器を利用した墓1基、柱穴状の小さな穴2基などの晩期の遺構を確認し、調査区またはその近くに住居がある可能性が高まりました。

24年度、学生の夏休みを利用して発掘調査は、8月9日から31日までおこなわれました。立命館大学のほか、京都大学、龍谷大学の学生・院生約90名が参加して、夏の杉澤にひとときの賑やかさをもたらしました。前年度の調査で貯蔵穴がふたつ見つかり、住居が近くにあることが推定されることから、その周辺の標高のやや高い場所と、逆にやや低い場所に調査区が設定されました。住居の有無を確認するためです。残念ながら住居の検出にはいたりませんでしたが、次のような成果が得られ、杉沢遺跡の重要性や縄文時代の様子がわかりました。

木の実類を貯蔵した穴(貯蔵穴) 貯蔵穴SK4は、直径約50cm、深さ約60cmの穴で、底は水分を多く含

み水が湧き出る層まで掘られていることが確認されました。木の実類を良好に保管するために掘られたものと考えられます。穴の中からは、縄文時代晩期の土器片が出土しています。他の調査区でも、植物の遺体をおおく含む同様の大きな穴が見つかりました。いずれも縄文時代晩期後半のものと推定されています。木の実類の多くはトチの実で、殻がついた状態で埋められ炭化していました。放射性炭素年代測定法の年代測定によると、穴から出土した縄文土器の年代とほぼ一致する縄文時代晩期後葉(いまから2400から2600年前頃)の年代に相当しました。

埋葬施設 長径122cm、短径83cm、深さ17cmの浅い穴が見つかり、中から縄文土器片が出土しています。この穴の縁を取り巻くように大きな石が並べられており、穴を埋めた土が塚状に盛り上がっていることから、成人のお墓か石を並べたまつり場の跡の可能性が考えられています。

今回、杉澤地区の方々と関わりを持って調査を進めることで、発掘調査の活性化にもつながりました。8月12日の区夏祭りでは、学生がスタッフとして参加され、発掘調査の状況や目的が紹介されました。教育委員会主催の発掘体験では、居残りで夕方まで参加する熱心な児童もいました。「考古学」を肌に感じてもらう、普段の生活では得られない体験をつうじて、遺跡の保存や伝承にもつながっていく調査になりました。(高橋 順之)



▲発掘調査のようす

湖の恵み—琵琶湖の漁業史②

河川のヤナ漁

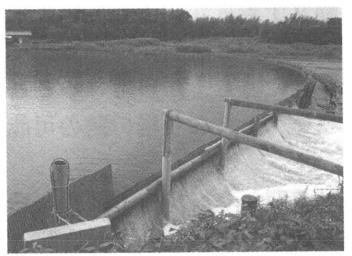
私たちの住む琵琶湖周辺では、淡水魚をとるためにさまざまな漁具・漁法が考案されてきました。なかでも水中に設置する定置漁具がさかんで、滋賀には前号のエリにならびヤナというものがあります。エリが湖の浅瀬や内湖・沼などに設けられるのにたいし、ヤナは杭と横木そして簾などで川の水を堰き止めてつくられます。現在は湖西の安曇川(写真1)や石田川で見られますが、近年までは米原市内の天野川でもおこなわれていました(写真2)。

ヤナにはビワマスなど遡上する魚用の「上りヤナ」(図1・2)と、落ちアユなど下る魚をとる「下りヤナ」があります。滋賀で見られるヤナはすべて上りヤナで、他県でもこのタイプが多いのですが、岐阜の揖斐川や木曽川ではアユ専用の下りヤナを見ることができます。

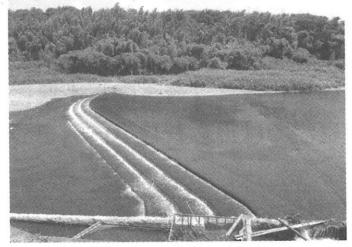
淡水面積のひろい滋賀では、昔からヤナがたくさんつくられてきました。筆者は約25年前に犬上川の河口でも見かけましたし、県内のベテラン漁師さんによると、琵琶湖に流れ込むほぼすべての川でヤナ漁がおこなわれていたということです。

古文献に登場するヤナ

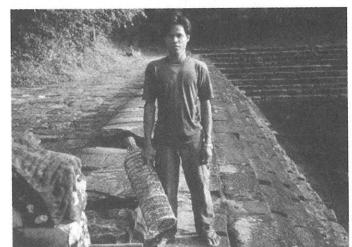
古文献のヤナについては、戦前から戦後に滋賀県で水産行政を担われた伊賀敏郎氏が詳しく研究されています(『滋賀県漁業史』滋賀県漁協連)



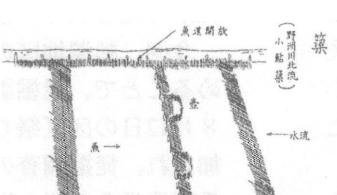
▲写真1 安曇川のヤナ



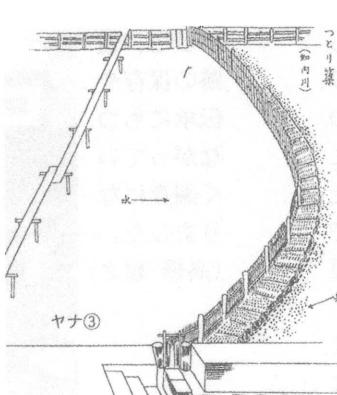
▲写真2 天野川のヤナ



▲写真3 カンボジアの籠



▲図1 ヤナの概略図



▲図2 ヤナの概略図

合会1954年)。それによると、古文献にはじめて登場するのは、古代中国の『周礼』という書物です。

そこには「梁水堰也、堰水為閑空、以笱(筌)承其空(後略)」と書かれています。要約すると、「梁(ヤナ)は川の水を堰き止め、一部から水を落としてその部分に筌を設置する」という意味です。筌(ウケ)とは竹や細木を筒状に編みあげて魚をとる仕掛けで、現在も日本はじめアジア一帯で使われています(写真3)。また、周とは紀元前11~5世紀の中国の古代国家ですが、当時の日本列島は野山や川などの自然食糧で生活していた縄文時代です。コメはまだ大陸から伝えられていません。そんな今から3000年も前、中国にはすでに「梁(ヤナ)」ということばがあり、実際に川でヤナ漁がおこなわれていたのです。

中国の別の書物によると、「石を並べて川の流れを堰き止め、魚道を狭めてウケに追い込む」という漁法もあったようです。このような仕掛けは愛知川上流にあった、石とウケを組み合わせる「もじり」に似ています。石で水を堰き止めるものは、福井県の九頭竜川上流でドジョウを捕る「落しがけ」や、岩手県北上川のサケ・マス用の留(トメ)と呼ばれるヤナなど日本各地でおこなわれていました。

日本の文献では、1300年前に書かれた『古事記』に、奈良の吉野川でヤナ漁をする漁師が登場します。「作筌有取魚人」とあり、「ウケで魚を捕る人がいた」という意味です。同じころの『日本書紀』にも「神武三年」のできごとに、神武天皇が吉野川で漁師を見つける場面があります。これは「有作梁取魚者」とあり、意味は「ヤナで魚を捕る人がいた」ということです。さらに『日本書紀』「天武四年」には、稚魚を乱獲から保護するために「比満沙伎理梁(ヒマサキリヤナ)」を禁じる命令が天武天皇から出されます。ヒマとはヤナに設置する簾のすきまのことで、すきまのせまい簾では稚魚まで捕ってしまうので、稚魚は逃げられるようにすきまの広い簾を使え、というお達しでした。

1100年前の平安時代中ごろには、瀬田川や京都の宇治川に網代(あじろ)という施設が設けられました。これは、宮中の食事をつかさどる役所「大膳司」に魚を献上したヤナだったとみられます。ほかにも『播磨風土記』『出雲風土記』『万葉集』『古今和歌集』など、ヤナに関する記述は21の古文献にみられます。

600年前の室町時代には、野洲市の三上神社と兵主神社の「神供築」が野洲川に設置されました。これは神に供える名目で地元の漁師にヤナの漁業権を与え、漁師からの運上金(税金)によって神社経営がなされたのです。同様のしくみは多賀大社

でもあります。この場合ヤナは犬上川に設けられました。また同じころ描かれた、大津市の名刹・石山寺縁起絵巻でもヤナの様子が描かれています。

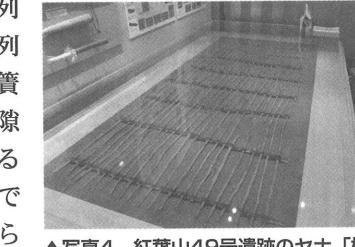
江戸~明治時代では、琵琶湖に注ぐほぼすべての河川でヤナ漁がおこなわれ、効率的な漁法として定着し、獲物の川魚は県内や京都で消費されたようです。

遺跡で発見されたヤナ

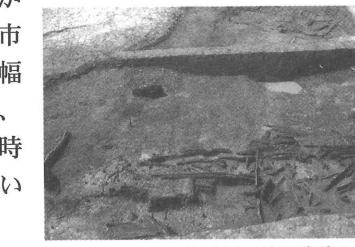
一般的に遺跡は地下の深いところに埋もれているので、地下水によって保存された杭や木材、さらにヨシや竹などを編んだ簾が見つかることがあります。しかしヤナというものの自体があまり知られていないので、考古学者の中でも注目されていませんでした。よって発掘例が少なく、筆者が調べたところでは2010年度までに全国で10か所余りの遺跡で発見された程度です。そのうち代表的なものについて紹介します。

北海道石狩市の紅葉山49号遺跡は、日本海に面した石狩平野にあります。石狩川の紅葉山砂丘に立地し、日本海からは3km内陸です。ここは低湿地になっていて、約4000年以上前の縄文中期後半ごろのヤナ(報告書では「鮎(漁労施設)」)が11基見つかったと報告されました。これは現段階で世界最古のヤナと思われます。発掘では、幅20~30mの河川跡に19の杭列が検出され、これに木組みの「柵」がセットされました。杭列とは、川の中に杭を数十から数百本も打ったものです。また「柵」とは、すぐれ状にヤナギの枝をノブドウなどのツルで編んだものです(写真4)。魚たたきの棍棒も出土しました。北海道ではアイヌ文化にサケ・マスのヤナの記録がありますが、そのもとになった遺構です。ほかにも北海道大学の構内調査でも9世紀代のヤナが見つかっています。ここでも多数の杭と横木があり、モリや魚叩きの棍棒がありました。

さて、滋賀県では東近江市(旧能登川町)の斗西遺跡で、1700年前の古墳時代のヤナが見つかりました(写真5)。それは筆者が担当した発掘でした。幅10~20mの川跡を横断して3列に杭が打たれ、その杭列にヨシを編んだ2列の簾を斜めにたてて、簾の隙間からはいった魚をとる上りヤナでした。現在では、安曇川で秋にかけられるビワマス用のヤナが同じ仕掛けです。守山市の古高・経田遺跡でも幅6mの河川跡で杭列と、ヨシ簾の敷かれた古墳時代のヤナが見つかっています。



▲写真4 紅葉山49号遺跡のヤナ「柵」



▲写真5 斗西遺跡のヤナ

まとめ

古文献や遺跡にみるヤナの歴史についてまとめると、次のようにになります。

第1段階: ヤナは、縄文時代の当初にはじまったと思われます。雨が多く地形の複雑な日本列島では、川の浅瀬に石を積み上げて水を堰き止め、遡上する魚を集めて捕獲しました。現在もおこなわれている原始的な漁法で、これを「石止めヤナ」と呼びます。川の石を使うのでどこでも造ることができます。中国の古い文献にも登場しますし、大津市にある瀬田川沿いの石山貝塚でもコイやフナの骨が多数確認されており、7000年前ごろにおこなわれていた可能性があります。

第2段階: 約5000~4000年前で縄文時代の中ごろに、杭の加工や簾を編む技術が発達し磨製石斧による木の伐採・加工技術が進んだころです。川を横断して杭と横木で水を堰き止め、一部に溜まつた魚をタモ網などでとる仕掛けで、「杭止めヤナ」と呼びます。石狩紅葉山49号遺跡が実際に見つかった最古の資料です。現在のヤナの原型が、縄文時代半ばにはできていたと思われます。

第3段階: 川の中に杭列と横木で水を堰き止め、一部分から水を落とし、ここにウケを設置するものです。この方法を「ウケ設置ヤナ」と呼びます。発掘では、約3500年前の縄文時代後期にあたる東京都東村山市下宅部遺跡や、約2800年前の新潟県青田遺跡でウケの実物資料が見つかっています。自然界と共に生した北海道のアイヌ文化でも、ウライというウケのあるヤナがおこなわれていました。

ちなみにアジア以外では、19世紀のアメリカ・ミズーリ州の先住民(インディアン)がナマズ用のヤナを仕掛けていた記録があります。また、中世フランスではパリ近郊のセーヌ川で、王侯と漁師とがヤナ設置の許認可権をやりとりした文献があります。よって現在は見られなくなった国や地域でも、川に浅瀬があって魚が泳ぎ人の住んだところではヤナ漁がおこなわれていた可能性が高いのです。

さて現在も日本各地の川でおこなわれているヤナ漁は、淡水の豊かな水産資源からタンパク質を得るために水の流れる速さや川の形、そして魚の種類に応じてさまざまに発明された素晴らしい漁法といえます。それは数千年も前の縄文時代に始まったものでした。いっぽう琵琶湖にみるエリは、コメ作りが中国大陆から伝わって以後、材料となる竹とともにたらされました。その年代は今のところ約千年前と考えられ、古さではヤナに軍配が上がる結果となります。しかし、そのいずれも伝わる琵琶湖周辺の暮らしには、貴重な漁業文化が息づいているといえるのです。

植田 文雄(佛教大学・琵琶湖博物館)